

試験科目 小論文（問題）

受験番号					
フリガナ					
氏名					

今日、グローバル化の進展とともに、世界共通語の英語を話せない人材はグローバル化の波に取り残され、ローカルに留まるという主張が聞かれるようになった。しかしながら、母語別に人口をみると、中国語は10億人超、英語はほぼ5億人、スペイン語は3億人と続き、日本語は第九位の1億人超である。果たして、英語を学ぶことはどのくらい、重要なのだろうか。英語を母語としない国において英語教育を深化させることの是非を論じるとともに、自分自身のキャリアや人生における英語の重要度と予定について説明しなさい。

# 小論文 問題

次の文章を読み、第一問および第二問に答えなさい。

読者諸氏は、PISA調査 (Programme for International Student Assessment) という名前を聞いたことがあるだろう。OECD (経済協力開発機構) が、参加各国の一五歳を対象に三年ごとに行っている世界共通の学力調査だ。

調査項目は「読解力」「科学的リテラシー」「数学的リテラシー」、そして二〇〇九年からは一部の国で「デジタル読解力」が実施されている。

## 【中略】

このPISA調査で、毎回上位に名を連ねるのがフィンランドである。

以来、フィンランドの教育方法が注目を集め、「フィンランド・メソッド」なる言葉まで生まれ、いまも教育関係者の視察が相次いでいる。フィンランドの国語教科書は翻訳・出版もされているので、関心のある方はご覧になっていただきたい。

特にそこで注目して欲しいのは、各単元の最後が演劇的な手法を使ったまともになっている箇所が、数多くある点だ。

「今日読んだ物語の先を考えて人形劇にしてみよう」

「今日読んだ小説の、一番面白かったところを劇にしてみよう」

「今日のディスカッションを参考にして、ラジオドラマを作ってみよう」

といった具合だ。

ここにはどんな意味があるのだろう。

フィンランド・メソッドに象徴されるヨーロッパの国語教育の主流は、インプット＝感じ方は、人それぞれでいいというものだ。文化や宗教が違えば、感じ方は様々になる。前章までで説明してきたように、車内で他人に声をかけるといふ行為一つとっても、それを失礼だと感じる人もいれば、声をかけなければ失礼だと感じる人もいる。これは内面の自由、良心の自由に関わることで、強制することはできないし、教育の場でそれを一律にはいけない。特に宗教などが違うと、これを強制することは人権問題にまでなる。

しかし、多文化共生社会では、そういったバラバラな個性を持った人間が、全員で社会を構成していかなければならない。だからアウトプットは、一定時間内に何らかのものを出しなさいというのが、フィンランド・メソッドの根底にある思想だ。

これは現行の日本の国語教育と正反対の構図になっていることがわかるだろう。私たちは、「この作者の言いたいことは何ですか? 五〇字以内で答えなさい」といった形でインプットを狭く強制され、一方でアウトプットは個人の自由だということで作文やスピーチでお茶を濁してきた。しかし、現実社会は、どちらに近いだろうか。アウトプットがバラバラでいいなどという会社があったら、即刻潰れてしまうだろう。しかし、どの企業も多様な意見や提案を必要としている。問題は、その多様な意見を、どのようにまとめていくかだ。

フィンランドの教育においては、いい意見を言った子どもよりも、様々な意見をうまくまとめた子が誉められると聞く。

日本では、A、B、C、D、Eと様々な意見が出て、最終的な結論がBとなったら、B君が先生に誉められる。あるいはユニークな意見を言ったCさんが誉められるかもしれない。しかしフィンランドでは、何も意見を言わなかったとしても、F君が全体のとりまとめをしたとしたら、彼が一番誉められる。日本でそんなやり方をしたら、「F君は、

何も意見を言っていないくて、ただまとめただけなのに誉められるなんてずるい」と言われるかもしれない。

OECDがPISA調査を通じて求めている能力は、こういった文化を越えた調整能力なのだ。これを一般に「グローバル・コミュニケーション・スキル (異文化理解能力)」と呼び、その中でも重視されるのが、集団における「合意形成能力」あるいはそれ以前の「人間関係形成能力」である。

このような話を教育関係の講演会ですると決まって、「あ、金子みすゞですね。『みんなちがって、みんないい』ですね」と言う先生方がいる。私はそうは思わない。そうではないのだ。

「みんなちがって、たいへんだ」

という話をしているのだ。

OECDの基本理念は、多文化共生にある。

多文化共生とは何か。それは、企業、学校、自治体、国家など、およそどんな組織も、異なる文化、異なる価値観、異なる宗教を持った人々が混在していた方が、最初はおつと面倒くさくて大変だけれども、最終的には高いパフォーマンスを示すという考え方だろう。

先に見たように、成長型の社会では、ほぼ単一の文化、ほぼ単一の言語を有する日本民族は強い力を発揮した。しかし、<sup>成熟型の社会</sup>では、多様な力が力となる。少なくとも、最新の生物学の研究結果が示すように、多様性こそが持続可能な社会を約束する。

だとすれば、これから国際社会を生きていかなければならない子どもたちには、「最初はおつと大変だけれども、その「大変さ」を克服する力をつけていこう」というのがPISA調査の最大の眼目だろう。

しかし日本では、調査結果のじり貧状態だけに目がいつて、学力低下の議論が巻き起こり、教科学習のコマ数を増やし、せっかく作られた総合的な学習の時間を減らすという愚挙が行われた。二〇〇〇年代後半の日本の教育政策がいかにトンチンカンなものになっていたかがわかるだろう。それはある種の鎖国状態と呼んでもいい。

みんなちがって、たいへんだ。

しかし、この「たいへんさ」から、目を背けてはならない。

〔出典：平田オリザ『わかりあえないことから——コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書、二〇一二年。なお、文章の一部を省略してある。〕

第一問 筆者は下線部①のように主張しているが、何が「たいへん」であるのか、また「たいへん」であるにもかかわらず、「目を背けてはならない」のはなぜか。本文に即しながら、筆者の考えを二〇〇字以内でまとめなさい。(縦書き。句読点も字数に加える)

第二問 下線部①の筆者の主張と照らし合わせた場合、現代の日本社会はどのような課題を抱えているか。具体的な課題を一つ取り上げて、四〇〇字以内で論じなさい。(縦書き。句読点も字数に加える)